

婚約者を追って満州へ―大陸の花嫁

広田閑子 鹿沼市

●満州へ

私は8人兄弟の6番目として、秋田の雪深い山の中で生まれました。

昭和19年、満蒙開拓青少年義勇軍（注1）の花嫁募集があり、その義勇軍として満州に渡りたいとここに嫁ぐために、募集の人員の中に入れてもらうことになりました。女子訓練所で食糧増産のために役立つなら、と思っていました。この時は、その後の満州で、大変な出来事が起きることになるうとは思いませんでした。

5月、各県から集められた花嫁候補44人が、新潟港から船に乗り、韓国の釜山港に上陸。新京、ハルビン、牡丹江、そして目的地の勃利（ボツリ）女子訓練所へ向かいました。勃利の駅から1時間ばかり歩いたところに、その訓練所がありました。

●女子訓練所の生活

そこはあたりに家はなく、広い場所に茅（かや）ぶき屋根の平屋の粗末な建物と、近くにやや新しい小さい建物があつて、私たち12名ばかりはそこに入りました。所長は熊井武世女史、その下に班長2人と炊事係のおばさんがいました。

花嫁修業を少しは期待していたのに、いつになつてもそれらしきことは何一つありませんでした。



訓練所に着いた花嫁候補たち

た。毎日の食べ物はほとんど。毎日の食べ物ほとんど。毎日食うたか記憶がないのですが、おそろく粗末な食事だったでしょう。

開拓部落に出かけて、奉仕作業や見学を行いました。白系ロシア人の部落に何班かに分かれて遊びに行つたこともありま

また、陸軍病院へ2泊で看護の仕方の勉強に行つたことがあります。湿布の仕方とか包帯の巻き方、シーツや寝巻の取り替え方などを教えてもらつたりしました。白衣の兵隊たちが大勢寝ていました。その中に凍傷の足の人がいて、それを見たとき、あまりのひどさに気絶しそうになりました。ただ、食事は兵隊と同じで、久しぶりに魚のフライや白いご飯を、おなかいっぱい食べさせてもらいました。訓練所の食事とは天と地の差でした。ある朝のこと、宿舎で寝ていた私は、足元の掛布団がなくなつていることに気づきました。非常に寒冷な土地だったせいとか、建物はゆがんで立てつけが悪く、入口の戸が壊れていたところから入

つて盗まれたようです。以前にも窓から長い棒を差し込み、その先につけたかぎに荷物をひっかけ、盗まれそうになったことがあつて、怖い思いをしました。女ばかりなので狙われていたのです。これから寒さが厳しくなるというのに、困つてしまいました。私の実家に手紙を出して送ってもらい、なんとか助かつたという思い出もあります。

●合同結婚式

町から何十キロも離れた所に開拓の部落があちこちにあり、一つの部落には4、5軒の粗末な茅ぶきの家がありました。そこは花嫁を迎える男性ばかりの土地でした。あるとき、トラックで山道を走り、花嫁を待つ男性ばかりのところに、何人1かずつに分かれて見学に行きました。

しばらくして、所長に一人ひとり呼ばれ、写真を見せられ、出身地、年齢を知らされただけで「あなたはこの部落の、この人の所に行きなさい」と、付き合ひもない、どういう人か分からないのに、一方的に結婚を決められ、不服を言うとなんか「あなたはこのためにここに来たのでしょ」と諭されたよう

です。11月23日、44組の合同結婚式が軍隊の人の立会いの下、行われました。式が終わって、第二の故郷となるそれぞれの部落へトラックで出発しました。私と夫は汽車で、夫の兄家族がいる孫呉

に向かいました。

あんな山奥に嫁いだ仲間たちですが、自分たちの意志もなく結婚するとは、想像もしなかったことでしょう。山の中で不便だというばかりでなく、戦争はひどくなるし、しかも男たちは召集されて不在、大きなお腹を抱えた人など、どんな思いで逃げまどったことでしょう。また、逃げ切れず亡くなった人もいただろうことを思うと、今でも胸が痛みます。

●わずか3か月の結婚生活

夫のいる圏泡(けんぼう)開拓団にはまだ住む家がないので、私だけ夫の叔父のところへ春までいることになりました。叔父は義勇隊の幹部で、町から3、4歳奥の官舎に住んでいました。

11月末のこと、そこは大変寒い所で、雪がかなり積もっていました。夫と別れ、トラックに乗せてもらい、そこにたどり着きました。叔父夫婦と子供3人、そこで冬を越しました。その後、叔父がチチハルに転勤になったので、私も一緒に付いていきました。

5月、夫が迎えに来て、2日ばかりで目的地の圏泡へ向かいました。その頃は汽車が通っていましたが、いよいよ戦争が危うくなったのか、線路は国境付近であったため、まもなく取り外されてしまいました。家が出るまで開拓団本部に住み、

家が出てから2歳ばかり離れた部落に移りました。そこは若い開拓団員たちが建てた粗末な家

でした。茅ぶきの屋根に土壁の家で、ペチカ(暖炉)を境に鈴木さん一家(夫婦と1歳の女の子)と同居でした。8畳にも満たない部屋に窓が一つでした。他のもう一軒は佐々木さん、あとは馬小屋と外にドラム缶の風呂がありました。この第二の故郷だったところは、なだらかな丘の中腹にあり、周りは家が一軒もなく、ただただ広い野原がどこまでも続いていました。春になると野の花が何歳も続いて咲き、夢のような所でした。

ある日の夕方、外のドラム缶風呂に入っていたら、オオカミが50メートル先くらいまでやってきていました。私の叫び声で夫たちが、銃を持ってかけつけてくれ、オオカミは逃げて行きました。初めての経験で本当に恐ろしく、驚きましたが、近くに誰もいなかったら、命はなかったと思います。

一度、種まきの手伝いをしたことがあります。その当時は機械などないので、鍬と馬を使って畑を掘り起こしたと思います。

やがて妊娠して、だんだん動くのがつらくなってきました。

●夫の召集、そして逃亡

8月の始めの頃、夫に召集令状がきました。部落は3軒でしたが、各部落のその他の男性も翌日

には馬で出兵してしまい、後には女ばかり残されました。

夫が出征しても、どこの部隊に入隊したかはわからず、何日かが過ぎました。ようやく1枚のがきが届き、「もしもの時は再婚するように」とそれだけ書いてありました。部隊名はありません。どこでどうしているのか、心配でしたが、探しようがないので、返事も出せませんでした。

ほどなくして、開拓団の本部に集められました。ここには危ないので、町へのがれて南下するようにと、指令がありました。

第二の故郷だった圏泡の神社、家、生活のすべてを焼きはらい、少しばかりの荷物を持って馬車で、入植5年(自分は4か月)、苦勞してやっと住み慣れた所を捨てて、そこを去ることになりました。この先どうなるのかわからない不安でいっぱいでした。

男性はほとんど召集されていて、残っていたのはわずか3人くらいだったと思いますが、荷物を馬車に積んで出発しました。その際、匪賊に襲われるかもしれないからと、銃の撃ち方を教わり、銃と玉をそれぞれ渡されました。途中馬が動かず、いったん本部に引き返し、2日ばかりで、ようやくノン江の町へ着きました。

あるとき、1台のトラックに大勢の兵隊が乗せ

られていくのを見ました。もう、町には日本人の男性が見当たらないことから、それは最後のシベリア行きだったに違いありません。

● 収容される

ところが、町に着いたものの、はロシア兵が大勢いて銃や時計、革製品など、めぼしいものはすべて取られてしまいました。兵舎（収容所）に入られ、その夜は恐ろしくて、まんじりともできませんでした。兵舎には、避難した年寄りの男性と子供を抱えた女性ばかりで、日本人の兵隊は一人もいませんでした。「ああ、戦争に負けたんだな」と、そのとき漠然と思いました。

収容所は兵舎などを転々と変わり、やがて落ちていたところは、軍人家族が住んでいた元官舎（日本式の平屋）でしたが、畳の表はなく荒らされた家でした。食べ物には1日2食。コーリヤンコップ1杯、汁は塩汁で、野菜がほんの少し入っているだけのみじめなもの。空腹に悩まされ、大変ひもじい思いをしました。子供たちは栄養失調で次々と死んでいきました。

11月、かなり寒くなってきました。リーダー的な人が「このままここで冬を越すのは無理だからなるべく南へ行ったほうがよい、知人でもいればその人を頼って行ったほうがよい」と勧めてくれました。それを聞いてチチハルの叔父さんを頼つ

ていこうと思い、ある日の早朝、チチハル行きの貨車に乗りました。牛馬を乗せる貨車ですから、小さな窓が2つあるきりで中はうす暗かったです。15人くらい乗っていたでしょうが、知らない人ばかりです。隣にいた女性の背中を見ると、すでに死んだ子供が負ぶわれていました。

夕方にチチハル駅に着き、そこで解散になりました。さて、どうしようと思い、4、5人の群について行きました。その人たちは知人を頼っていたらしく、私も一緒に泊めてもらいましたが、そこで食べさせてもらった白いご飯のおいしかったこと…。

叔父さんが元の住所にいと聞いて、翌日尋ねました。治安が非常に悪かったので、叔父さんのはぞき窓から私を確かめて、それから中に入れてくれました。そこには叔父家族と義姉とその子供2人、知り合いの人でいっぱいでした。それでも叔父さん夫婦は温かく迎えてくれました。

● 出産はしたものの

1月になって出産ということになり、産婆さんを見つけてもらい、難産でしたが無事生まれました。しかし、長い間の栄養失調のためか、4日目で亡くなってしまいました。死体は叔父さんがどこかに埋めてくれたようです。

2週間くらいたって、中国人の家に住み込みで

働きに出ました。そこでは大事にしてくれて、「産後1か月は大事にしなさい」と言ってくれました。その家では水がなくて買っていたので、洗濯はできないし、風呂は年に1度と聞きましたので、私は叔父さんのところに時々風呂をもらいに行ったりしました。

そのうち、日本人の住んでいた家を買ったらしく、そこに住むことになりました。ある時、奥さんから「うちは男の子4人なので女の子が欲しい。夫の女の子を生んでくれないか」と言われ、びっくりして、その家にとどまることはできず、そこを出ました。

次に働いたのは雑穀屋でした。しばらくして、いよいよ日本へ帰れるというので、その話をする時、「日本へ帰っても家は焼かれ、何も無いんだよ。ここにいなさい」などと言われました。その頃、いろいろな噂やデマが飛び交っていたのです。

● 命からがらの帰国

昭和21年、暑い季節だったと思います。いよいよ日本に帰る日が来て、叔父さん家族と貨車に乗りました。途中、松花（ショウカ）江という大きな川があり、舟でそこを渡り、一晚野宿をしました。危険なので女、子供を真ん中にして、周りに何人かの男の人が守ってくれました。いよいよ舟に乗るコロ島に着きましたが、大勢なので順番がな

かなかまわつて来ません。何日か待つてようやく乗船でき、数日後に九州の佐世保に着きました。乗った船は貨物船で、船底の広い場所に雑魚寝、食べ物や虫のついた乾パンでした。赤痢患者が出たので、船中で足止めされ、1週間後によく上陸することができました。そこからまた満員列車に乗り、何日も風呂に入らず垢だらけ、栄養失調、着の身着のまま、命からがら実家にたどり着いたのでした。

●その後

その後、夫の帰るのを待つていました。1年くらいしてシベリアで戦病死したとの知らせがありました。結婚生活は3か月にも満たないものでした。夫の実家からは、まだ若いし、良いところがあったら再婚してほしいと言つて来たので、籍を戻しました。しかし誰一人、夫の死亡した様子を見た人もいないし、死んだとも思えず、10年くらい待ちました。

結局、親も心配しましたので、縁あつて再婚し現在に至つていますが、どこでどういう死に方をしたのか、いまだに信じられない気持ちです。再婚してからも、もし帰つてきたら…と思うことがあります。シベリアで死んだということになっていますが、南方へ行ったのではないか、と言う人もいますし、未だにどういう死に方をしたのか

わかりません。

叔父さん夫婦はもう亡くなつていますが、叔父さんの世話にならなければ、満州での過酷な体験に今の自分はなかつたと思うと、叔父さんのお墓に足を向けて寝られないほど、感謝の気持ちでいっぱいです。

余談ですが、先日、一緒に満州に行った仲間の一人がテレビに映つていました。車いすに乗つてボツリの訓練所跡を訪ねているシーンでした。

また、やはりテレビで見たのですが、戦後30年たつてから、日本に中国人の家族とともに帰つてきた仲間もいました。そういえば、44人のうち、無事に帰つてこられたのは、いったい何人だったのでしようか、わかりません。

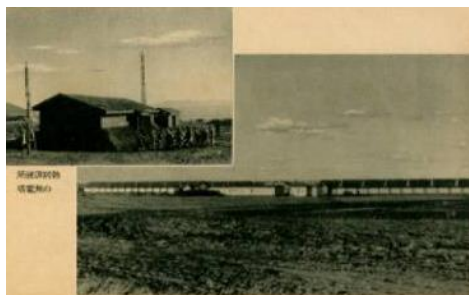
以上、ざつとですが、皆様方には「二度と戦争を起こしてはならない」という私の思いをお伝えできれば、と思つてお話をさせていただきました。

注1【満蒙開拓青少年義勇軍】

満蒙開拓移民（まんもうかいたくいみん）は、満州事変以降太平洋戦争までの期間に日本政府の国策によって推進された、中国大陸の旧満州、内蒙古、華北に入植した日本人移民の総称である。

日本政府は、1938年から1942年の間には20万人の農業青年を、1936年には2万人の家族移住者を、それぞれ送り込んでいる。戦局の悪化による兵力動員で、

1942年以降は成人男性の入植が困難となり、15歳から18歳ほどの少年で組織された「満蒙開拓青少年義勇軍」が主軸となった。少年らは茨城県水戸の「内原訓練所」で2ヶ月間訓練され、満州へ送られた。その後さらに満州では「満州開拓青年訓練所」にて3年間現地にて軍事訓練を受け、各地へ開拓移民として配属される。対ソ連への戦略的観点から、主にソ連国境に近い満州北部が入植先に選ばれた。（ウィキペディアより）



満州ボツリ訓練所（絵葉書）